

奈良の
むかし
はなし 第86話

長谷寺の天狗杉

文・山崎しげ子

「隠国の泊瀬の山は あやにうら麗し」。初瀬の山は本当に素晴らしい、と『日本書紀』で時の雄略天皇は手放して褒めたたえている。

その麗しい初瀬山の中腹に長谷寺は建つ。今回は、そんな長谷寺に

棲んでいた、悪戯好きの天狗のお話。

* * *

江戸時代、長谷寺の第十四世能化（住職）英岳の、まだ小僧時代のこと。英岳は、夕方になると長い登廊に吊るされた多くの燈籠に灯をつけて回り、残った油を自分の行燈に注いで勉強に励んでいた。

その登廊の周辺に大杉が茂り、天狗が棲んでいた。天狗は、あろうことか、英岳がつけてまわった登廊の燈籠の灯を消したり、油皿をひっくり返したりと、悪戯ばかり。

怒った英岳は、「よし、わしが将来、能化となったら、天狗の棲む杉の木を一本残らず伐ってやる」と言い、勉強に励み、やがて能化となった。

ある時、お寺の建物の修理のため、用材として杉の木を伐ることに。

木こりが杉の木の最後の一本を伐ろうとしたとき、英岳は「私が能化

になれたのも、天狗の悪戯のおかげ」と、一本の杉を天狗の棲みかとして残した。それが今も残る「天狗杉」。

* * *

長谷寺の長い登廊。399段の石段が下中上の三廊に折れ、その下登廊を登り切った右側に聳えるのが「天狗杉」。その大きさに圧倒される。

登廊を登りきると、本堂。ご本尊は約10mの十一面観世音菩薩立像。奈良時代の開山、徳道上人の造立。

この観音様、霊験ことにあらたかと評判となり、平安時代以降、公家、貴族から庶民まで多くの人々から信仰され、今も参拝者は絶えない。ただ、今のお像は室町時代の作。

* * *

「花の御寺」としても有名な長谷寺。冬も趣き深い。冬に咲く赤や薄紅色の牡丹が可憐。雪の日、本堂の舞台からの眺めも格別で、眼下の広大な境内の諸堂が一面、雪に覆われ、白一色。目を上げれば、雪の与喜山の連なりの前に、雪を被った天狗杉が天を衝いてすくと立つ。まさに冒頭の「あやにうら麗し」の世界に誘い込まれる。

物語の場所をアプリで調べて訪れよう

長谷寺（桜井市初瀬731-1）

近鉄大阪線長谷寺駅下車、徒歩15分



問 桜井市観光まちづくり課
☎0744-42-9111



アプリについてはこちら



2024年3月、桜井市観光アプリ「さくらい巡り」が誕生。今回のお話の舞台である長谷寺などの社寺や歌碑、史跡のほか、大和さくらいブランド認定品を販売する店舗などがアプリ内に登録されています。それらのスポットを訪れることでプレゼント抽選に応募できるポイントが貯まります。インフルエンサーによるおすすめ情報の掲載や、桜井市マスコットキャラクター ひみこちゃんのAIチャットを搭載するなどコンテンツも多彩。春や秋を中心に期間限定ラリーイベントも実施され、12月10日（火）までは「秋の奈良さんぽ紅葉めぐりスタンプラリー」が開催されています。

スタンプラリーについてはこちら



観光アプリ「さくらい巡り」で桜井市の魅力を隅々まで堪能！